

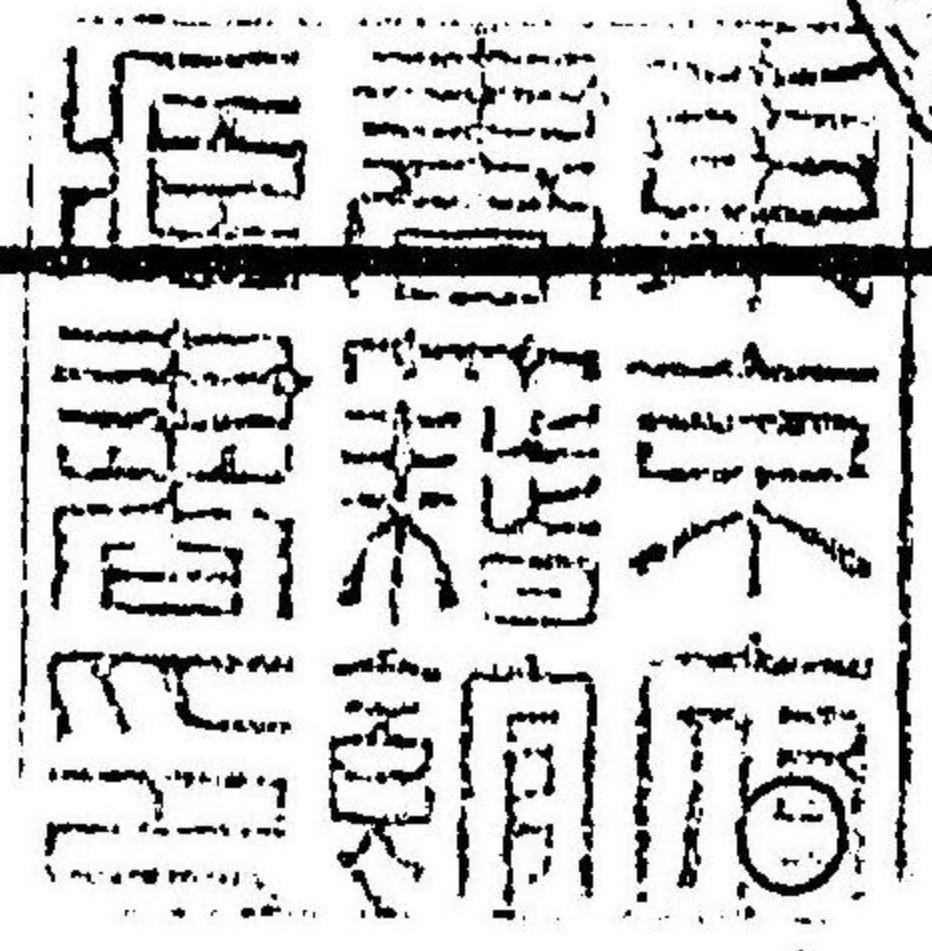
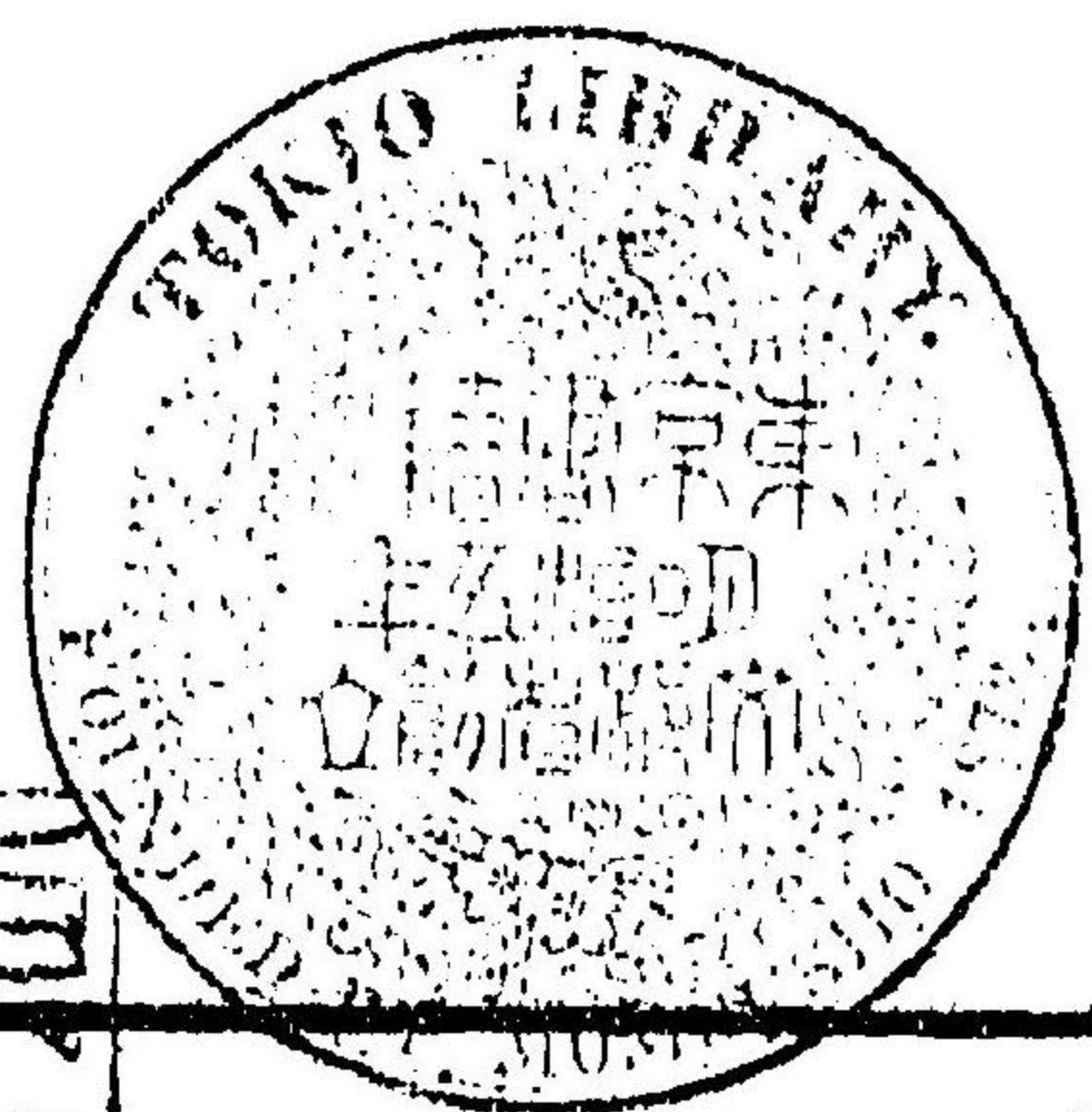
佛蘭西治罪法
四

CF2
3
07

共五本

東 京 圖 書 館	
一 四 函	新 門
二 架	一 部
四 九 九 八 號	類

CF2
3
07



佛蘭西法律書 治罪法第四

明治九年文部省交付

權大内史箕作麟祥 譯

第三卷 裁判言渡ヲ取消サント願フ方

法(千八百八年十二月十日決定同月二十日布告)

第一章 吟味ノ手續及ヒ裁判言渡ヲ取消ス事

第四百七條 重罪輕罪註誤ニ付キ為シタル終

佛蘭西法律書 第一卷第一章第一款 一

審ノ裁判言渡及ヒ其言渡ヲ為ス前ノ吟味ノ
手續ハ後ノ數條ニ記スル場合ト差別トニ循
ヒ其取消ヲ願フコトヲ得可シ

○第一款 重罪ニ付テノ裁判言渡ヲ
取消ス事

第四百八條 重罪ノ被告人刑ヲ言渡サレタル
時嘗テ控訴院ノ重罪取調局ヨリ其被告人ヲ
重罪裁判所ニ移シタル言渡又ハ重罪裁判所
ニテ為シタル吟味ノ手續又ハ重罪裁判所ノ
處刑ノ言渡ニ缺ク可カラサル法式ニ背キ或

ハ其法式ヲ缺キタルコトアリテ治罪法中ニ其
法式ノ如ク行ハサル時ハ其言渡及ヒ吟味手
續ノ効ナキコトヲ別段定メタルニ於テハ刑ヲ
言渡サレタル者又ハ檢察官ヨリノ求メニ因
リ處刑ノ言渡ヲ取消シ又ハ効ナキ吟味ノ手
續ヨリ後ノ諸件ヲ取消ス可シ
又言渡ヲ為シタル裁判所ノ管轄異ナリタル
時又ハ裁判所ニテ被告人又ハ檢察官ノ法律
上ニ於テ授カリタル權利ニ因リ求ムル所ニ
付キ其言渡ヲ為スヲ肯セズ又ハ言渡ヲ為ス

ヲ怠リタル時ハ治罪法中ニ裁判言渡又ハ吟味手續ノ効ナキヲ別段定メサル場合ト雖モ亦前項ニ等シク之ヲ取消ス可シ

第四百九條 裁判所ヨリ重罪被告人ヲ無罪ナリト言渡シタル時ハ檢察官ヨリ法律ヲ保護スル為メノミニ付キ其無罪ノ言渡及ヒ其前ニ為シタル吟味ノ手續ヲ取消サント求ム可シ但シ是カ為メ被告人ノ害ヲ為ス可カラス
第四百十條 重罪裁判所ヨリ罪犯ニ付キ言渡シタル刑ト其罪犯ニ付キ法律上ニ定メタル

刑ト異ナルニ因テ其言渡ヲ取消ス可キ時ハ
檢察官又ハ刑ヲ言渡サレシ被告人ヨリ其取消ヲ求ムルヲ得可シ

又重罪裁判所ニテ刑法ノ箇條中ニ罪犯ニ管レタル刑ナキヲ以テ第三百六十四條ニ記スル如ク被告人ヲ赦宥スル言渡ヲ為シタル時
檢察官其罪犯ニ管レタル刑アリトスルニ於テハ檢察官ヨリ其赦宥ノ言渡ヲ取消サント求ムルヲ得可シ

第四百十一條 裁判所ヨリ言渡シタル刑ト刑

法上ニテ定ムル所ノ刑ト相違スルヲナキ時
ハ其言渡書ニ誤テ刑法中ノ他ノ箇條ヲ抄出
レタルヲ以テ口實ト為レ其言渡ヲ取消サン
ト求ム可カラス

第四百十二條 如何ナル場合ニ於テモ民事ノ
原告人ハ重罪裁判所ヨリ被告人ヲ無罪ナリ
トスル言渡又ハ被告人ヲ赦宥スル言渡第三
百六
十四條ヲ取消サント求ム可カラス然レモ裁
判所ニテ其言渡書ヲ以テ被告人ノ求ムル所
ヨリ更ニ過分ナル損失ノ償ヲ民事ノ原告人

ニ言附クルヲアル時ハ民事ノ原告人其言渡
書ノ中ニテ其言附ニ管スル部分ヲ取消サン
ト求ムルヲ得可シ

○第二款 輕罪又ハ註誤ニ付テノ裁
判言渡ヲ取消ス事

第四百十三條 輕罪又ハ註誤ニ付テハ裁判所
ヨリ被告人ニ刑ヲ言渡シタルト之ヲ赦宥シ
タルトヲ問ハス檢察官又ハ被告人又ハ民事
ノ原告人第四百八條ニ循ヒ終審ノ裁判言渡
ヲ取消サント求ムルヲ得可シ

然レハ被告人赦宥ノ言渡ヲ得タル時ハ檢察官又ハ民事ノ原告人ヨリ被告人ノ權利ヲ保護スル為メノ法式ニ違フタル事又ハ其法式ヲ缺キタル事ヲ申立テ其赦宥ノ言渡ヲ取消サント求ムルコトヲ得ス

第四百十四條 第四百十一條ノ規則ハ輕罪及ヒ註誤ニ付キ為シタル終審ノ裁判言渡ニ通シ用フ可レ

○第三款 前二款ニ通シ用フ可キ規則

第四百十五條 覆審院又ハ控訴院ニテ吟味ノ手續ヲ取消ス時ハ其過失アル官吏又ハ下吟味掛リ裁判役ノ費用ヲ以テ其吟味ノ手續ヲ再ヒ行ハシム可キコトヲ言渡スヲ得可レ然レハ此等ノ官吏ニ重キ過失アリテ且此治罪法ヲ布告シタルヨリ二年ノ後ニ非サレハ此條ノ規則ヲ通シ用フ可カラズ

○第二章 覆審院ニ願出ス事 裁判言渡又ハ吟味

手續ノ取消ヲ願フ事ニシテ此章ハ即チ前章ノ續キナリト看做ス可シ

第四百十六條 本案ニ管セサル預審ノ言渡 預審

ニシテ且終審ハ確定ノ裁判言渡ノ後ニ非サ
 ノ言渡ヲ云ノハ確定ノ裁判言渡ノ後ニ非サ
 レハ之ヲ取消サント求ム可カラス但レ一方
 ノ者自己ノ隨意ニテ其預審ノ言渡ノ如ク執
 行ノタリト雖モ後ニ其言渡ヲ取消サント求
 ムル時相手方ヨリ其取消ヲ拒ムノ憑據ト為
 ス可カラス
 裁判所ノ管轄ノ異ナリタルニ付キ其言渡ヲ
 取消サント求ムル時ハ此條ノ規則ヲ通シ用
 フ可カラス

第四百十七條 刑ヲ言渡サレシ被告人其言渡

ノ取消ヲ願ハントスル時ハ其願書ヲ書記官
 ニ出シ其被告人ト書記官ト之ニ姓名ヲ手署
 ス可シ若シ被告人姓名ヲ手署スルヲ欲セ
 ス又ハ之ヲ知ラサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
 又刑ヲ言渡サレシ被告人ノ代書師又ハ其名
 代人ヨリ其願ヲ為ス時モ其願書ヲ出スニ付
 テノ法式ハ亦前ニ記スル所ニ等シトス但シ
 名代人ヨリ其願ヲ為ス時ハ名代ノ證書ヲ其
 願書ニ添ヘ差出ス可シ
 其願書ハ別段設ケタル簿冊ニ之ヲ登記ス可

レ但シ其簿冊ハ公ケニ衆庶ニ示ス可ク如何ナル人ト雖モ其拔書ヲ請取ルヲ得可レ

第四百十八條 民事ノ原告人又ハ檢察官ヨリ重罪輕罪註誤ニ付キ為シタル終審ノ裁判言渡ヲ取消サント願フ時ハ前條ニ記スル如ク其願書ヲ簿冊ニ登記シタル外其願書ヲ三日内ニ相手方即チ被告ニ送達ス可シ

其相手方現ニ禁錮ヲ受クル時ハ書記官其願書ヲ讀聽カセ其相手方之ニ姓名ヲ手書ス可シ若シ姓名ヲ手署スルヲ欲セス又ハ之ヲ

知ラサル時ハ其旨ヲ附記ス可レ

又其相手方禁錮ヲ受クルヲナキ時ハ取消ノ願人其願書ヲ使吏ニ托シテ之ヲ相手方又ハ其擇ミタル住所ニ送達セシム可シ但シ此場合ニ於テハ路程三「リ」リアトトル毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ可シ

第四百十九條 民事ノ原告人裁判言渡ヲ取消サント願フ時ハ諸書類ニ添ヘテ其裁判言渡書ノ公正ノ寫ヲ差出ス可シ

其民事原告人ハ百五十「フ」ランクノ金高罰金ニ供

モノヲ官署ニ預ク可シ若シ又抗傳シテ言渡
ヲ受ケタル時ハ其半高ヲ官署ニ預ク可シ但
シ其金高ヲ預ケサル時ハ取消願ヲ為スノ權
ヲ失フ可シ

第四百二十條 左ノ數人ハ罰金ニ供スル金高
ヲ預クルニ及ハス

第一 重罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル者

第二 行政ノ事務ニ付キ又ハ官ノ歳入或
ハ官地ノ事務ニ付キ取消願ヲ為ス官吏
總テ此他ノ者ハ取消願ノ上負訴訟トナル時

罰金ヲ言渡サル可シ然レモ其取消ノ願書ニ
添ヘ左ノ書類ヲ出ス者ハ其金高罰金ニ供ス
高為メノ預クルニ及ハス

第一 六「^ララ^レク以下ノ税銀ヲ出ス旨ヲ
證スル租税目錄ノ拔書又ハ全ク税銀ヲ
免レタル旨ヲ證スル邑ノ税官ノ受合書
第二 住所ノ邑長又ハ其補佐ヨリ渡シ郡
長檢印レテ州長ノ允許レタル貧困ノ受
合書

第四百二十一條 重罪ハ言ヲ待タズ輕罪又ハ

註誤ノ事ニ付キ禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者
 ハ現ニ禁錮ヲ受ケタル時又ハ保證ヲ立テタ
 ル上ニテ赦宥ヲ得タル時ニ非サレハ取消願
 ヲ為ス可カラズ
 此場合ニ於テハ其取消ノ願書ニ添へ其禁錮
 ノ證書又ハ保證ヲ立テタル上ニテ赦宥ヲ得
 タル證書ヲ差出ス可レ
 然レモ裁判所ノ管轄異ナリタルヲ以テ取消
 ヲ願ハレトスル時ハ之ヲ願フ者現ニ覆審院
 所在ノ地ノ裁判所附留置場ニ入りタルノ證

ヲ立ルノミニテ其願ヲ為スヲ得可レ但シ
 其留置場ノ監守人ハ願人ヨリ檢事長ニ差出
 シテ檢事長ノ檢印セシ願書ヲ檢視シタル上
 ニテ其願人ヲ受取り留置場ニ入ル、
 可レ

第四百二十二條 刑ヲ言渡サレレ者又ハ民事
 ノ原告人ハ言渡ノ取消ヲ為シタル時又ハ其
 時ヨリ十日内ニ嘗テ其言渡ヲ為シタル裁判
 所ノ書記局ニ其取消ヲ求ムル憑據書ヲ差出
 ス可レ○書記官ハ其受取證書ヲ渡レタル上

直チニ其憑據書ヲ檢察官ニ送ル可シ

第四百二十三條 取消願ヲ為レタルヨリ十日

ノ後ニ檢察官ヨリ裁判事務宰相ニ吟味ニ管

シタル諸書類ト願人ヨリ既ニ取消願ノ憑據

書ヲ差出シタルニ於テハ其憑據書トヲ送呈

ス可シ

願人ノ取消ヲ願フ裁判言渡ヲ為シタル裁判

所ノ書記官ハ諸書類ノ目錄ヲ無税ニテ記シ

之ヲ其書類ニ添フ可シ若シ此規則ニ違フ時

ハ書記官覆審院ヨリ百「フ」ラ「ク」ノ罰金ヲ言

渡サル可シ

第四百二十四條 裁判事務宰相ハ諸書類ヲ受

取リタルヨリ二十四時間ニ之ヲ覆審院ニ送

リ且之ヲ送呈セシ官吏ニ其旨ヲ告知ス可シ

又刑ヲ言渡サレシ者ハ其取消ノ願書並ニ裁

判言渡書ノ寫及ヒ憑據書ヲ直チニ覆審院ノ

書記局ニ出ス「フ」得可シ然レハ民事ノ原告

人ハ覆審院ノ代言人ノ世話ヲ得ルニ非サレ

ハ此條ニ記スル規則ノ如ク執行フ可カラス

第四百二十五條 重罪輕罪註誤ノ別ヲク總テ

裁判言渡ノ取消ヲ願出シタル時ハ覆審院ニ
テ此章前ニ條ニ記スル期限ノ終リシ時直チ
ニ其願ニ付キ裁判ヲ言渡シ又ハ其期限ノ終
リシ時ヨリ遅クトモ一月内ニ其裁判ヲ言渡
ス可シ

第四百二十六條 覆審院ニテハ預メ取消願ヲ
取上クルコトヲ允許スルニ及ハスシテ其願ヲ
棄却レ又ハ裁判言渡ヲ取消ス可シ

第四百二十七條 覆審院ニテ輕罪又ハ註誤ニ
付テノ裁判言渡ヲ取消ス時ハ其言渡ヲ為レ

タル裁判所ト同等ノ裁判所ニ其吟味ヲ移ス
可シ

第四百二十八條 覆審院ニテ重罪ニ管シタル
言渡ヲ取消ス時ハ次ノ七條ニ記スル如ク處
置ス可シ

第四百二十九條 覆審院ニテ左ノ裁判所ニ吟
味ヲ移スコトヲ言渡ス可シ

第二百九十九條ニ記シタル原由中ノ一ニ
付キ言渡ヲ取消ス時ハ裁判所ノ管轄ヲ定
ム即チ何地ノ重罪裁判所ニ被告ノ人犯且重
罪ノ旨ヲ告ク可キノ言渡ヲ示ク

罪ヲ犯シタリト告ク可キ旨ヲ言渡シタル
 ヨリ以外ノ控訴院重罪取調局
 重罪裁判所ノ言渡ヲ取消シ又ハ其裁判所
 ノ吟味ノ手續ヲ取消シタル時ハ其言渡ヲ
 為シタルヨリ以外ノ重罪裁判所
 又民事ノミニ管スル箇條ニ付キ裁判言渡
 又ハ吟味ノ手續ヲ取消ス時ハ其下吟味掛
 リ裁判役ノ在ル裁判所ヨリ以外ノ初告裁
 判所但レ此場合ニ於テハ預メ和解ノ式ヲ
 行フヲナク直チニ初告裁判所ニテ吟味ノ

手續ニ取掛ル可シ
 若シ裁判所ノ管轄異ナリタルヲ以テ其裁
 判言渡又ハ吟味ノ手續ヲ取消ス時ハ覆審
 院ヨリ管轄ノ裁判所ヲ指示シ其裁判所ニ
 吟味ヲ移ス可シ若シ最初下吟味ヲ為シタ
 ル裁判役ノ在ル初告裁判所ニ其吟味ヲ移
 スト相當ナル時ト雖モ其裁判所ニ移ス可
 カラス其他ノ初告裁判所ニ其吟味ヲ移ス
 可シ
 又被告人刑ヲ言渡サレタルト雖モ法律上

ニテ其申立ラレシ所為ヲ罪犯ナリト為サ
 サルニ因リ其刑ノ言渡ヲ取消ス時民事ノ
 原告人アルニ於テハ最初下吟味ヲ為シタ
 ル裁判役ノ在ル裁判所ヨリ以外ノ初告裁
 判所ニ其吟味ヲ移ス可シ若シ又民事ノ原
 告人アラサル時ハ別段其吟味ヲ移スニ及
 ハス

第四百三十條 覆審院ニテ吟味ヲ移ス可キ裁
 判所ヲ撰定ス可キ時ハ取消ノ言渡ヲ為シタ
 ル後直ニ裁判役會議ノ室ニテ其撰定ニ付

キ商議ヲ為ス可シ但シ其商議ノ上決定シタ
 ル所ヲ取消ノ言渡書ニ附記ス可シ

第四百三十一條 覆審院ヨリ吟味ヲ移ス言渡
 アリシニ因リ其吟味ヲ為ス可キ下吟味掛リ
 裁判役ハ言渡ノ取消トナルニ重罪裁判所又
 ハ控訴院ノ管轄内ノ裁判役中ヨリ之ヲ撰ム
 可カラス

第四百三十二條 覆審院ヨリ控訴院ニ吟味ヲ
 移シタル時ハ其控訴院ニテ當然為ス可キ吟
 味ノ手續ヲ為シ終リタル後其管轄地内ノ重

罪裁判所ヲ別段指定メテ其裁判ヲ移ス可レ
 第四百三十三條 覆審院ヨリ重罪裁判所ニ吟
 味ヲ移シタル時未タ罪犯ノ告訴ヲ受ケサル
 同罪人アルニ於テハ重罪裁判所ヨリ下吟味
 掛リ裁判役ヲ指定メ且檢察長ヨリ其代役ヲ
 指定メテ各其下吟味ノ手續ヲ為サシメ然ル
 上ニテ諸書類ヲ控訴院ノ重罪取調局ニ送り
 其局ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キ
 ヲ否ヲ定ム可シ

第四百三十四條 法律上ニテ定ムル所ノ刑ト

重罪裁判所ノ言渡シタル刑ト相異ナルニ因
 リ其刑ノ言渡ヲ取消ス時ハ其吟味ヲ移シタ
 ル重罪裁判所ニ於テ以前ノ裁判所ニテ嘗テ
 陪審ノ為シタル決斷書ニ循ヒ其言渡ヲ為ス
 可シ
 又更ニ他ノ原由ニ付キ刑ノ言渡ヲ取消ス時
 ハ其吟味ヲ移シタル重罪裁判所ニテ更ニ辨
 論ヲ為サシム可シ 證人ヲ呼出シ且更ニ陪審
 為サシムルヲ云フ
 重罪裁判所ノ言渡中ノ一部ノ法律ニ背キ

タル時ハ覆審院ニテ其一部ノミヲ取消ス可
シ

第四百三十五條 覆審院ニテ刑ノ言渡ノ取消
ヲ得タル上更ニ重罪ノ裁判ヲ受ク可キ者ハ
之ヲ禁錮シタル儘ニテ控訴院又ハ重罪裁判
所ニ移シ或ハ名捕ノ言渡書ニ循ヒ之ヲ名捕
ヘテ控訴院又ハ重罪裁判所ニ移ス可シ

第四百三十六條 重罪輕罪註誤ノ別ナク民事
ノ原告人取消願ヲ為レ負訴訟トナル時ハ赦
宥ヲ得タル被告人ニ對シ百五十フランクノ

償ヲ為シ且其被告人ノ裁判所費用ヲ償ヒ並
ニ百五十フランクノ罰金ヲ官ニ納ム可シ但
シ以前抗傳シテ裁判言渡ヲ受ケタル時ハ其
罰金ノ高ヲ七十五フランクトス第四百十
九條見合
官署又ハ官吏ハ取消願ノ上負訴訟トナリタ
ル時相手方ヘノ償ヲ為シ且其裁判所費用ヲ
償フノミトス第四百二
十條見合

第四百三十七條 取消願ヲ為シ覆審院ニテ其
願ノ如ク取消ヲ為ス時ハ其取消ノ言渡ノ文
面如何ナルヲ問ハス其願人ニ當テ官署ニ預

ケ置キタル金高ヲ直チニ還ス可レ但シ其取
消ノ言渡ノ文面ニ其金高ヲ還ス可キヲ別
段記セサル時ト雖モ亦同一ナリトス

第四百三十八條 一度取消ノ願ヲ為シ覆審院
ニテ其願ヲ棄却シタル上ハ其願人如何ナル
憑據及ヒ口實アリト雖モ再ヒ其言渡ヲ取消
サント願フ可カラス

第四百三十九條 取消願ヲ棄却スル覆審院ノ
言渡ハ書記官之ヲ拔書ニ記シ姓名ヲ手署シ
テ三日内ニ覆審院ノ檢事長ニ送り檢事長ヨ

リ之ヲ裁判事務宰相ニ送呈シ其宰相ヨリ其
取消ヲ願フ裁判言渡ヲ為セシ裁判所ノ檢察
官ニ之ヲ送ル可レ第五百三十七條見合

第四百四十條 一度覆審院ニ願出テ裁判言渡
ノ取消ヲ得タル後更ニ再度ノ裁判言渡ヲ取
消サント覆審院ニ願出ル時ハ千八百七十九
年九月十六日ノ法律ヲ以テ定メタル規則ニ循ヒ
處置ス可レ

第四百四十一條 覆審院檢事長裁判事務宰相
ヨリ受取リタル命令書ヲ示シテ覆審院ノ刑

事局ニ裁判所ノ書類又ハ裁判言渡書ノ法律ニ背キタル旨ヲ申立ル時ハ其書類又ハ裁判言渡書ヲ取消シ別段ノ道理アル時ハ司法警察官吏又ハ裁判役此篇第四卷第三章ニ記スル如ク犯罪ノ訴ヲ受ク可シ

第四百四十二條 控訴院又ハ重罪裁判所又ハ輕罪裁判所又ハ註誤裁判所ヨリ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其言渡ノ取消ヲ願出ルヲ得可キ場合ニ於テ定期内ニ其願ヲ為ス者ナキ時ハ既ニ定期ノ終リタルト否トヲ問ハス覆審

院ノ檢察長自己ノ職務ヲ以テ其取消ノ旨ヲ覆審院ニ申立テ其言渡ヲ取消サシムルヲ得可シ但シ其取消ヲ願ハサル者ハ其言渡ノ取消トナリシ旨ヲ申立テ其言渡ノ如ク執行ヲ得可シ

○第三章 裁判調直ノ事

第四百四十三條 千八百六十七年六月二十九日左ノ如ク改ム重罪ト輕罪トヲ問ハス總テ裁判所ノ言渡ニ付キ左ノ場合ニ於テハ調直ヲ願フヲ得可シ

事局ニ裁判所ノ書類又ハ裁判言渡書ノ法律ニ背キタル旨ヲ申立ル時ハ其書類又ハ裁判言渡書ヲ取消シ別段ノ道理アル時ハ司法警察官吏又ハ裁判役此篇第四卷第三章ニ記スル如ク犯罪ノ訴ヲ受ク可シ

第四百四十二條 控訴院又ハ重罪裁判所又ハ輕罪裁判所又ハ註誤裁判所ヨリ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其言渡ノ取消ヲ願出ルヲ得可キ場合ニ於テ定期内ニ其願ヲ為ス者ナキ時ハ既ニ定期ノ終リタルト否トヲ問ハス覆審

院ノ檢事長自己ノ職務ヲ以テ其取消ノ旨ヲ覆審院ニ申立テ其言渡ヲ取消サシムルヲ得可シ但シ其取消ヲ願ハサル者ハ其言渡ノ取消トナリシ旨ヲ申立テ其言渡ノ如ク執行ヲ得可シ

○第三章 裁判調直ノ事

第四百四十三條 一千八百六十七年六月二十九日左ノ如ク改ム重罪ト輕罪トヲ問ハス總テ裁判所ノ言渡ニ付キ左ノ場合ニ於テハ調直ヲ願フヲ得可シ

第一 人ヲ殺害シタル罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル後嘗テ死シタルト為セシ人其實存命ナリト思料シ得可キ十分ナル憑據アル時

第二 輕罪又ハ重罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル後他人同一ノ事ニ付キ更ニ刑ヲ言渡サレ其二箇ノ言渡相觸ルニ因リ其中一方ノ者無罪タルノ證ト為ス可キ時
 第三 吟味ノ席ニ出テ證ヲ申述ヘシ證人中ノ一人被告入刑ノ言渡ヲ受ケシ後其

被告人ニ對シテ偽證ヲ述ヘタル訴ヲ受ケ刑ヲ言渡サレタル時○斯ノ如ク刑ヲ言渡サレシ證人ハ後ノ吟味ノ時更ニ其申述ヲ聽ク可カラス

第四百四十四條 一千八百六十七年六月二十九日左ノ如ク改ム裁判言渡ノ調直ヲ願フ可キ權ハ左ノ數人ニアリトス

- 第一 裁判事務宰相
- 第二 刑ヲ言渡サレタル者
- 第三 刑ヲ言渡サレタル者死シタル後ハ

其配偶者、其子、血属ノ親、其財産全部ノ遺囑ノ贈遺ヲ受ケタル者又ハ其財産一部ノ遺囑ノ贈遺ヲ受ケタル者、刑ヲ言渡サレタル者ヨリ別段名代ノ權ヲ授カリシ者

輕罪ニ付テハ禁錮ノ刑ヲ言渡サレ又ハ政權民權、族權ノ全部又ハ一部ヲ奪フ可キ刑ヲ言渡サレタル時ニ非サレハ裁判調直ヲ願フ可カラス
 ○裁判事務宰相ハ自己ノ公務ヲ以テ
 檢事長ニ命令書ヲ與ヘ又ハ願人ノ求メニ因

リ其命令書ヲ與ヘ檢事長ヲシテ覆審院ノ刑事局ニ其調直ヲ求メシム可シ
 ○前條ノ第二及ヒ第三ノ場合ニ於テハ願人其相觸ル、二箇ノ言渡中後ノ言渡アリシヨリ二年内又ハ偽證ヲ述ヘシ證人ノ刑ヲ言渡サレタルヨリ二年内ニ其調直ノ願書ヲ裁判事務宰相局ニ差出スニ非サレハ之ヲ取上ク可カラス
 ○何レノ場合ニ於テモ覆審院ノ言渡アルニ至ル迄ハ裁判事務宰相ノ命令ニ因リ裁判言渡即トシテ調直ヲ願フ執行ヲ止メ又其後ハ覆審院ニテ

調直、願、取上クルヲ允許スル言渡ニ因
リ其裁判言渡、執行ヲ止ム可シ

第四百四十五條 (千八百六十七年六月二十九

日左ノ如ク改ム) 覆審院ニテ裁判言渡調直、

願、取上ケタル時其事件取調ノ手續未タ十

分ニ濟サルニ於テハ覆審院ニテ其事件本案

ノ取調、證人及ヒ其他ノ者ノ對理ノ吟味、人違

有無ノ取調並ニ其他事實、以テ得可キ問糺

及ヒ法式ヲ為シ又ハ他ノ裁判所ニ任シテ之

ヲ為サレム可シ○又其事件取調ノ手續既ニ

十分濟ミタル時刑ヲ言渡サレタル者ト其證

人及ヒ其他管係アル者トテ更ニ相對シテ辨

論セシムルヲ得可キニ於テハ覆審院ニテ

刑ノ言渡ヲ取消シ及ヒ其他調直ノ妨ケトナ

ル可キ諸件ヲ取消シテ其問糺ス可キ箇條ヲ

定メ其刑ヲ言渡サレタル者ヲ其刑ヲ言渡シ

タルヨリ以外、裁判所ニ移ス可シ○陪審ノ

決斷ニ任カス可キ事件重罪ヲニ付テハ覆審

院ヨリ吟味ヲ移シタル控訴院ノ檢事長更ニ

重罪告訴狀ヲ記ス可シ

第四百四十六條 〔千八百六十七年六月二十九日左ノ如ク改ム〕刑ヲ言渡サレタル者ト證人及ヒ其他管係アル者トヲ相對シテ辯論セシムルヲ得サル時殊ニ刑ヲ言渡サレタル者ノ死去シ又ハ抗傳シタル時又ハ刑ノ訴ノ期滿免除或ハ刑ノ期滿免除ノ期限ニ至リシ時ハ覆審院ニテ相對シテ辯論ヲ為サシムルヲ得サル旨ヲ證セシ上ニテ預メ刑ノ言渡ヲ取消スニ及ハス又他ノ裁判所ニ吟味ヲ移スニ及ハスシテ民事ノ原告人アル時ハ其原告

人ト死者ノ為メ覆審院ヨリ任シタル「キ」ト
 一ル^{世話}人トノ面前ニテ其本案ノ裁判ヲ為ス可シ○此場合ニ於テハ覆審院ニテ不當ナル刑ノ言渡ヲ取消シ又別段ノ道理アル時ハ死者ノ罪ヲ申雪スル言渡ヲ為ス可シ
 第四百四十七條 〔千八百六十七年六月二十九日左ノ如ク改ム〕第四百四十三條ノ第一ノ場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ取消シタル上其犯人ニ重罪並ニ輕罪ノアラサル時ハ覆審院ヨリ他ノ裁判所ニ吟味ヲ移スニ及ハス

假リノ規則

此治罪法ヲ布告スル前ニ第四百四十三條ノ
第ニ及ヒ第三ニ循ヒ調直ヲ願フコトヲ得可キ
刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ此法布告ノ時ヨリ
第四百四十四條ニ記シタル調直ノ願書ヲ差
出ス可キ期限ヲ算フ可シ

○第 四 卷 別段ノ罪犯吟味手續ノ事(第一
章ヨリ第四章ニ至ル迄ハ千八百八年

十二月十二日決定同月廿二日布告第
五章ヨリ第七章ニ至ル迄ハ千八百八
年十二月十三日決定同月廿三日布告

○第一章 贋造ノ訴

第四百四十八條 總テ書類贋造ノ訴ノ時ハ其
贋造ナリト述フル書類ヲ差出シテ之ヲ書記
局ニ納メ書記官其書類ノ每葉ニ姓名ヲ手署
シ且横線ヲ畫シテ其書類ノ模様ヲ詳カニ調
書ニ記シ又其書類ヲ差出シタル者其每葉ニ
姓名ヲ手署シ且横線ヲ畫ス可シ若シ其者姓

名ヲ手署スルコトヲ知ラサル時ハ其旨ヲ附記
ス可シ○書記官此等ノ法式ヲ行ハスシテ其
書類ヲ受取りタル時ハ五十フランクノ罰金
ヲ言渡サル可シ

第四百四十九條 若シ贋造ナリト述フル書類
ヲ公ケノ預リ役所ヨリ取出シタル時ハ之ヲ
渡シタル官吏亦前條ニ記スル如ク其書類ニ
姓名ヲ手署シ且横線ヲ畫ス可シ若シ此規則
ニ背ク時ハ五十フランクノ罰金ヲ言渡サル
可シ

第四百五十條 又贋造ナリト訴フル書類ハ司
法警察ノ官吏之ニ姓名ヲ手署シ又民事ノ原
告人又ハ其代書師出席スル時ハ此等ノ者亦
之ニ姓名ヲ手署ス可シ
被告人モ亦出席シタル時其書類ニ姓名ヲ手
署ス可シ
若シ此等ノ者姓名ヲ手署スルコトヲ得ス又ハ
手署スルコトヲ欲セサル時ハ其旨ヲ調書ニ附
記ス可シ
書記官此條ノ規則ニ背ク時ハ五十フランク

ノ罰金ヲ言渡サル可シ
 第四百五十一條 書類ヲ以テ裁判ノ所為又ハ
 民事ノ所為ノ憑據ト為シタル時ト雖モ其書
 類ノ贋造タルヲ訴ヘルヲ得可シ
 第四百五十二條 贋造ノ旨ヲ申立テタル書類
 ノ公ケノ預リ人又ハ私ノ預リ人ハ檢察官ノ
 言渡書又ハ下吟味掛リ裁判役ノ言渡書ニ循
 ヒ其預ル所ノ書類ヲ差出ス可シ若シ之ヲ差
 出ササル時ハ名捕ヲ受ク可シ
 其言渡書及ヒ書類差出ノ證書アル時ハ其預

リ人其書類ニ管係アル者ニ對シ既ニ之ヲ差
 出タルノ證アリトス可シ
 第四百五十三條 照徴ノ為メ差出シタル書類
 モ亦第四百四十八條第四百四十九條第四百
 五十條ニ記スル如ク姓名ヲ手署シ及ヒ横線
 ヲ畫ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ此數條ニ
 記スル所ノ罰金ヲ言渡サル可シ
 第四百五十四條 總テ公ケノ預リ人ハ其預ル
 所ノ書類ヲ照徴ノ為メ差出ス可シ若シ之ヲ
 出ササル時ハ名捕ヲ受ク可シ○之ヲ差出ス

可キノ言渡書及ヒ差出ノ證書アル時ハ其預
リ人其書類ニ管係アル者ニ對シ既ニ之ヲ差
出タルノ證アリトス可シ

第四百五十五條 公正ノ證書類ノ正本ヲ差出
ス可キ事ノ必要ナル時ハ其地ノ初告裁判所
ノ上席人其證書ノ正本ト讀合セタル上真正
ノモノナリト認メタル其寫ヲ其預リ人ノ方
ニ遺シ置ク可シ但シ上席人ハ其旨ヲ調書ニ
記ス可シ○其預リ人官吏タル時ハ其正本ノ
還リ來ルニ至ル迄其寫ヲ正本ニ代用シ其寫

ヨリ更ニ寫シタル副本ヲ渡スヲ得可シ但
シ其預リ人ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ訴訟法
第二百

三條
見合

然レモ其公正ノ證書ヲ簿冊中ニ登記シタル
ニ因リ一時之ヲ引離シテ差出スヲ得サル
時ハ裁判所ヨリ其簿冊ヲ差出ス可キヲ言
渡シ前ニ記スル手續ヲ行フ可キ義務ヲ釋放
スルヲ得可シ

第四百五十六條 私ノ證書ト雖モ照徴ノ為メ
之ヲ差出サレメ双方之ヲ認ムル時ハ照徴ノ

用ニ供スルヲ得可シ
 官吏ニ非サル者其證書ヲ預ル時ハ縱令自カ
 ラ之ヲ預リ居ル旨ヲ述ハタル時ト雖モ其證
 書ヲ差出サ、ルニ因リ直チニ之ヲ名捕フ可
 カラス然レモ證書ヲ出サ、ルニ付キ裁判所
 ニ呼出サレタル上之ヲ出サ、ルニ付テノ吟
 味ヲ受ケ終ニ負訴訟トナリタル時ハ其裁判
 言渡書ニ其者直チニ其證書ヲ出ス可ク若シ
 出サ、ルニ於テハ名捕フ可キ旨ヲ記スルヲ
 得可シ

第四百五十七條 證人證書類ノ贋造タルヤ否
 ニ付キ證ヲ申述フル時ハ之ニ横線ヲ畫レ且
 姓名ヲ手署ス可シ若シ手署スルヲ得サル
 時ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ

第四百五十八條 訴訟吟味ノ手續ヲ為ス間ニ
 差出タル證書ヲ一方ヨリ贋造ナリト申立ル
 時ハ相手方ヲレテ其證書ヲ用ント欲スルヤ
 否ヲ答ヘシム可シ 訴訟法第百
 十五條見合

第四百五十九條 相手方ニテ其證書ヲ用ヒス
 ト答フル時又ハ相手方八日內ニ其答ヲ為サ

サル時ハ其證書ヲ棄却レ吟味ノ手續及ヒ裁
 判言渡ニ取掛ル可シ
 若シ又相手方其證書ヲ用ヒント欲スル旨ヲ
 答フル時ハ主タル訴訟ノ吟味ノ手續ヲ為ス
 裁判所ニテ附帶ノ訴訟ト為シ其贋造ノ訴ヲ
 吟味ス可シ訴訟法第二百十五條以下ノ規
 則ニ循ヒ吟味ヲ為スヲ云フ
 第四百六十條 若シ證書ノ贋造タルヲ申立ル
 者ヨリ其證書ヲ出レタル者即チ其贋造ノ主
 謀或ハ附従タルヲ述フル時又ハ吟味ノ手續
 ニ因リ贋造ノ主従タル者猶生存シ且未タ其

罪ノ期滿免除ノ期限ニ至ラサルヲ知リ得
 タル時ハ此章ニ記スル如ク主タル訴訟トシ
 テ其罪ヲ申立ツ可シ即チ治罪法ノ規則ニ循
 スト云フ為
 此場合ニ於テ民事ノ訴訟アル時ハ贋造訴訟
 ノ裁判アルニ至ル迄民事ノ訴訟ノ裁判ヲ延
 ハス可シ
 又重罪輕罪註誤ニ付テノ刑事ノ訴訟アル時
 ハ裁判所ニテ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上贋
 造訴訟ノ裁判アルニ至ル迄其刑事ノ訴訟ノ

裁判ヲ延ハス可キヤ否ヲ預メ決斷ス可シ訴訟

法第百五
十條見合

第四百六十一條 被告人贋造訴ハ裁判所其手

記ノ書面ヲ差出シ及ヒ文字ヲ手記ス可キノ

求メテ受ク可シ若シ其求メテ肯セズ又ハ黙

シ居タル時ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ

第四百六十二條 若シ裁判所ニテ刑事又ハ民

事ノ訴訟ヲ吟味スル時贋造ノ憑據ト贋造ヲ

為シタリト思料ス可キ人ニ付テノ憑據トヲ

見出シタル時ハ檢察官又ハ裁判所ノ上席人

ヨリ其贋造ヲ為シタルト思料ス可キ地又ハ

其疑ヲ受ケタル者ノ所在ノ地ノ下吟味掛リ

役所ノ檢察長ノ代役ニ其書類ヲ送ル可シ但

シ其檢察官又ハ裁判所ノ上席人ハ其疑ヲ受

ケタル者ニ對シ引出狀ヲ出スヲ得可シ

第四百六十三條 若シ公正ノ證書ハ全部又ハ

一部ノ贋造タルヲ言渡シタル時ハ其言渡

ヲ為シタル裁判所ヨリ其證書中故シニ塗抹

シタル所アラハ之ヲ書加ヘ又故シニ書加ヘ

タル所アラハ之ヲ塗抹シ又ハ其證書ヲ改正

ス可キコトヲ言渡シ此等ノ事ヲ調書ニ記ス可
 照徴ノ書類ハ之ヲ持来リシ官署ニ返シ又ハ
 之ヲ出シタル者ニ返ス可シ但シ此事ハ裁判
 言渡ヨリ十五日内ニ之ヲ為ス可ク若シ書記
 官此規則ニ背ク時ハ五十フランクノ罰金ヲ
 言渡サル可シ
 第四百六十四條 其他贋造訴訟ノ吟味手續ハ
 他ノ犯罪訴訟ト同一ナリトス但シ次項ニ記
 スル所ハ其例外ナリトス

重罪裁判所ノ上席人檢察長又ハ其代役、下吟
 味掛リ裁判役、治安裁判役ハ其管轄地外ト雖
 モ國債ノ手形、佛蘭西國立銀行ノ手形又ハ諸
 州ノ銀行ノ手形ヲ贋造シ又ハ輸入シ又ハ配
 分シタル疑アル者ノ住居ニ至リ穿鑿ヲ為ス
 コトヲ得可シ
 貨幣贋造ノ罪又ハ國璽贋造ノ罪ニモ亦此條
 ノ規則ヲ通シ用フ可シ

○第二章 重罪被告人抗傳ヲ為ス事

第四百六十九條 重罪取調局ニテ被告人重罪

ヲ犯シタルト告ク可キ言渡ヲ為シタル後被
 告人ヲ名捕フルヲ得サル時又ハ其住所ニ
 其言渡書ヲ送リタルヨリ十日内ニ裁判所ニ
 出テサル時又ハ一度裁判所ニ出テ又ハ名捕
 ヘラレタル後逃込レタル時ハ重罪裁判所ノ
 上席人又其アラサル時ハ初告裁判所ノ上席
 人又其アラサル時ハ初告裁判所ノ裁判役中
 ニテ最モ先キニ職ニ任セラレタル裁判役ヨ
 リ其被告人十日内ニ出席ス可ク若シ出席セ
 サル時ハ法律違背ノ罪アルニ因リ其民権ヲ

奪ヒ抗傳吟味ノ時間其財産ヲ官ニ預カリテ
 其時間総テ裁判所ニ訴出スルヲ禁レ且如何
 ナル人タルヲ問ハス其被告人ノ居所ヲ知ル
 者アラハ之ヲ申出ツ可キ旨ヲ言渡ス可レ
 其言渡書ニハ被告人ノ申立テラレシ罪犯ト
 其名捕ヲ為ス可キ旨トヲ記ス可レ

第四百六十六條 其言渡書ハ次ノ日曜日ニ喇
 叭ヲ吹キ又ハ太鼓ヲ鳴ラシテ之ヲ公布レ且
 其言渡書ヲ被告人住所ノ門ト邑ノ官署ノ門
 ト重罪裁判所ノ訟庭ノ入口トニ貼附ス可レ

檢事長又ハ其代役ハ其被告人住所ノ官地及
ヒ記録税官署ノ支配人ニ其言渡書ヲ送ル可
シ

第四百六十七條 十日ノ期限ノ後ニ至リ抗傳
者ノ裁判言渡ヲ為ス可シ

第四百六十八條 代言人又ハ代書師ハ抗傳シ
タル被告人ノ權利ヲ保護スル為メニ出席ス
ルヲ得ス

若シ被告人歐羅巴ニ在ル佛蘭西ノ領地外ニ
アル時又ハ被告人裁判所ニ出ルヲ能ハサル

時ハ其親族又ハ朋友ヨリ其被告人ノ為メニ
辨解ヲ為レ且其辨解スル所ノ正當ナル旨ヲ
述フ可レ

第四百六十九條 重罪裁判所ニテ被告人ノ親
族又ハ朋友ノ辨解スル所ヲ正當ナリトスル
時ハ其模様ト其居ル地ノ遠近トニ從ヒ別段
定メタル時間被告人ヲ抗傳ノ儘裁判スルヲ
延ハレ其財産ヲ官ニ預カルヲモ亦之ヲ延
ハスヲ言渡ス可シ

第四百七十條 前ニ記スル場合ノ外ハ重罪取

調局ヨリ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス言渡書、
 抗傳者ヲシテ出席セシメントスル言渡書、
百六十五條ニ其言渡書ヲ公布シ及ヒ貼附シ
記スルモノタル旨ヲ證スル調書ヲ直チニ讀上ク可シ
 其讀上ヲ為レタル後重罪裁判所ニテ檢事長
 又ハ其代後ノ申立ヲ聽キタル上抗傳ノ儘言
 渡ヲ為ス可シ
 若シ吟味手續ノ中ニ法律ニ及キタル事アル
 時ハ重罪裁判所ニテ之ヲ取消シ其取消ト為
 シタル手續ヨリ後ノ總テノ手續ヲ更ニ改メ

テ為ス可キヲ言渡ス可レ
 吟味ノ手續法律ニ及キタル事ナキ時ハ重罪
 裁判所ニテ重罪告訴狀ニ付キ裁判言渡ヲ為
 レ且民事原告人ノ求ムル損失ノ償ヲ言渡ス
 可シ但シ此場合ニ於テハ陪審ヲシテ立會及
 ヒ決斷ヲ為サシムルナカル可シ
 第四百七十一條 抗傳者刑ヲ言渡サレシ時ハ
 其言渡ノ如ク執行罪案公示ヲタル時ヨリ其
 財産ヲ失踪者ノ財産ト同視シテ之ヲ支配シ
 被告人抗傳シテ受ケタル刑ノ言渡ヲ取消シ

得可キ期限ノ終リタルニ因リ其刑ノ言渡ノ
確的トナリタル後其相續人ニ其財産支配ノ
算計ヲ為ス可シ民法第二十八條見合

第四百七十二條 千八百五十年一月二日左ノ

如ク改ム抗傳者ノ刑ノ言渡書ハ其言渡ヨリ
八日內ニ檢事長又ハ其代役ノ申立ニテ抗傳
者最終ノ住所ノ州内ノ新聞紙ニ記入ス可シ
○又其言渡書ハ抗傳者最終ノ住所ノ門及ヒ
罪犯ヲ行フタル郡ノ首邑ノ官署ノ門並ニ重
罪裁判所ノ訟庭ノ入口ニ貼附シテ公示ス可

○又同上ノ期限内ニ其言渡書ノ寫ヲ抗傳
者住所ノ官地及ヒ記録稅官署ノ支配人ニ送
ル可シ○法律上ニテ抗傳者ノ受ケレ刑ノ言
渡書ヲ公示シタルヨリ生ス可キヲ定メタ
ル諸件ハ此條ニ記スル公示ノ式ヲ行ヒ終リ
シ旨ヲ證スル最終ノ調書ヲ記シタル日ヨリ
以來其効アリトス民法第二十六條見合
第四百七十三條 檢事長及ヒ民事ノ原告人ノ
外ハ被告人抗傳シテ受ケタル言渡ヲ取消サ
ント覆審院ニ願出ツ可カラス但シ民事ノ原

告人ハ其民事ニ管シタル條件ノミニ付キ其取消ヲ願フコトヲ得可シ

第四百七十四條 如何ナル場合ニ於テモ共ニ訴ヘラレタル被告人中ノ一人抗傳スルト雖モ出席シタル他ノ被告人ノ吟味ヲ當然遲延ス可カラス
裁判所ニ於テハ出席シタル被告人ノ裁判言渡ヲ為シタル後嘗テ犯罪ノ憑據トシテ書記局ニ納メタル諸物件ヲ其所有者又ハ其代權人ノ願ニ從ヒ還ス可キコトヲ言渡スヲ得可シ

○又別段ノ道理アル時ハ裁判所ニ於テ其所
有者又ハ其代權人ヲシテ入用次第早速其物件ヲ再ヒ裁判所ニ出ス可キノ盟約ヲ為サシ
ノタル上ニテ其物件ヲ還ス可キコトヲ言渡ス
ヲ得可シ

其物件ヲ還ス前ニ書記官其物件ノ模様ヲ調
書ニ記ス可シ若シ書記官其調書ヲ記セサル
時ハ百^ラフランク^クノ罰金ヲ言渡サル可シ

第四百七十五條 抗傳者ノ妻子父母等貧困ナ
ル時ハ其財産ヲ官ニ預カル時間其扶助料ヲ

給スルヲ得可シ

其扶助料ノ高ハ行政官之ヲ定ム可シ

第四百七十六條 抗傳シテ刑ヲ言渡サレシ被

告人其刑ノ期滿免除ノ期限ニ至ラサル中ニ

名捕ヘラレ又ハ自訴スル時ハ其刑ノ言渡並

ニ之ヲ名捕ノ可キトテ言渡シ又ハ其出席ヲ

為ス可キトテ言渡シタルヨリ以後ノ手續ヲ

當然取消シテ通常ノ規則ニ循ヒ更ニ吟味ノ

手續ヲ為ス可シ

然レモ抗傳シテ受ケタル刑ノ言渡ニ因リ准

死ノ罰ヲ受ク可キ時其被告人言渡書ヲ公示

シタル日ヨリ五年ノ後ニ至リ名捕ヘラレ又

ハ自訴シタルニ於テハ其五年ノ期限ニ至リ

シ日ヨリ被告人ノ裁判所ニ出ル迄ノ時間唯

死ヨリ生ス可キ諸件ノ効アルヲ民法第三十

條ニ記スル所ノ如クナリトス

第四百七十七條 若シ前條ノ場合ニ於テ事故

アリテ證人ヲ吟味ノ席ニ出テシムルヲ能ハ

サル時ハ其證人ノ申述書ト同罪ヲ犯セシ他

ノ被告人ノ返答書トテ吟味ノ席ニテ讀上ケ

可シ又裁判所ノ上席人罪犯ノ事並ニ被告人ノ事ニ付キ事實ヲ明瞭ナラシム可シト思料スル所ノ證書類モ亦之ヲ吟味ノ席ニテ讀上ク可シ

第四百七十八條 抗傳者後ニ裁判所ニ出テ重罪ノ告訴ヲ免カレタル時即チ無罪ナリト云フト雖モ其抗傳ニ因リ生シタル裁判所費用ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ受ク可シ

○第三章 裁判役ノ其職務外ニテ犯シタル罪及ヒ其職務ヲ行フニ當リ犯

レタル罪

○第一款 裁判役ノ其職務外ニテ犯シタル罪ヲ告訴シ及ヒ吟味スル事

第四百七十九條 治安裁判役、輕罪裁判所即チ初告

裁判ノ裁判役又ハ此等ノ裁判所ニテ檢察官ノ職ヲ行フ官吏其職務外ニテ懲治刑ニ處セラレ可キ輕罪ヲ犯セシノ申立ヲ受クル時ハ控訴院ノ檢察長其被告人ヲ控訴院ニ呼出シテ裁判言渡ヲ為サシム可シ但其言渡ハ之ヲ

控訴スルヲ許サス

第四百八十條 若シ又前條ニ記スル官吏施體
又ハ加辱ノ刑ニ處セラル可キ重罪ヲ犯セシ
ノ申立ヲ受クル時ハ控訴院ノ檢事長司法警
察ノ職ヲ行フ可キ官吏ヲ指定メ控訴院ノ上
席人下吟味掛リ裁判役ノ職ヲ行フ可キ官吏
ヲ指定ム可シ

第四百八十九條 若シ控訴院ノ裁判役又ハ控
訴院ニテ檢察官ノ職ヲ行フ官吏其職務外ニ
テ輕罪又ハ重罪ヲ犯シタルノ申立ヲ受クル

時ハ其申立ヲ聽キタル官吏前條ニ記シタル
如ク逕延ナク其下吟味ヲ為サレムル間ニ其
申立書ノ寫ヲ裁判事務宰相ニ送呈シ並ニ其
吟味ニ管レタル書類ノ寫ヲ其宰相ニ送呈ス
可シ

第四百八十二條 裁判事務宰相ハ其書類ヲ覆
審院ニ送リ覆審院ニテ被告人ニ罪アリト思
フ時ハ其吟味ヲ輕罪裁判所又ハ下吟味掛リ
裁判役ニ移ス可シ但シ其輕罪裁判所又ハ下
吟味掛リ裁判役ハ被告人ノ在リシ控訴院ノ

管轄地外ノ者タル可レ
又被告人重罪ヲ犯レタリト告ク可キ時ハ覆
審院ヨリ其被告人ノ在リシ以外ノ控訴院ノ
重罪取調局ニ其吟味ヲ移ス可シ

○第二款 覆審院、控訴院重罪裁判所
ノ裁判役ヲ除クノ外總テ其他ノ
裁判所ノ裁判役全員又ハ一員其
職務ヲ行フニ付キ職務冒瀆ノ罪
及ヒ其他ノ輕罪又ハ重罪ヲ犯シ
タルヲ告訴レ及ヒ吟味スル事

第四百八十三條

若シ治安裁判役即チ註誤商

法裁判所ノ裁判役、司法警察ノ官吏、輕罪裁判
所ノ裁判役又ハ此等ノ裁判所ニテ檢察官ノ
職ヲ行フ官吏其職務ヲ行フニ付キ懲治刑ニ
處ス可キ輕罪ヲ犯レタルノ申立ヲ受クル時
ハ第四百七十六條ニ記スル如ク其罪ヲ告訴
レテ之ヲ裁判ス可シ

第四百八十四條

若シ前條ニ記シタル官吏職
務冒瀆ノ重罪又ハ更ニ重キ罪ヲ犯レタルノ
申立ヲ受クル時ハ控訴院ノ上席人通常下吟

味掛リ裁判役ノ行フ職務ヲ行ヒ控訴院ノ檢事長通常檢事ノ行フ職務ヲ行フ可レ但レ此等ノ官吏ハ別段已レニ代テ職ヲ行フ可キ官吏ヲ指定スルヲ得可レ
 其上席人及ヒ檢事長ヨリ別段已レニ代ル可キ官吏ヲ指定ノサル間罪犯ニ管シタル物件アル時ハ總テノ司法警察官吏其物件ニ付テノ證ヲ立ツルヲ得可レ但レ其他ノ吟味手續ハ治罪法ノ一般ノ規則ニ循フ可レ
 第四百八十五條 若レ商法裁判所或ハ輕罪裁判

判所ノ裁判役全負其職務ヲ行フニ付キ職務冒瀆以上ノ重罪ヲ犯レタルノ申立ヲ受クル時又ハ控訴院ノ裁判役一負或ハ數負若クハ控訴院ノ檢事長或ハ其代役其職務ヲ行フニ付キ職務冒瀆以上ノ重罪ヲ犯シタルノ申立ヲ受クル時ハ後ノ數條ニ記スル如ク處置ス可レ

第四百八十六條 前條ノ重罪犯ハ之ヲ裁判事務宰相ニ申立テ其宰相被告人ニ重罪アリト思料スル時ハ覆審院ノ檢事長ニ其申立ニ從

ヒ重罪ヲ告訴ス可キヲ命ス可シ
 又同上ノ重罪犯ノ為メ損害ヲ蒙リタルト述
 ル者ハ直チニ其重罪犯ヲ覆審院ニ申立ル
 得可シ但レ此事ハ為スニハ其申立人裁判
 所ノ裁判役全負或ハ一負ヲ相手方ト為レテ
 損害ノ償ヲ得ント訴フル場合又ハ既ニ覆審
 院ニ上告シタル訴ニ附帶シテ其重罪ヲ申立
 ル場合ニ限ル可シ
 第四百八十七條 覆審院ノ檢事長裁判事務宰
 相ヨリ受取リタル書類又ハ申立入ヨリ直チ

ニ受取リタル書類ニ因リ事情ヲ明瞭ニ知得
 スルヲ能ハスト思フ時ハ其檢事長覆審院ノ
 上席人ニ之ヲ申立テ其上席人裁判役一負ヲ
 レテ覆審院所在ノ地ニ於テ證人ノ申述ヲ聽
 カレメ又ハ其他ノ吟味手續ヲ為サシム可シ
 第四百八十八條 若シ覆審院所在ノ地外ニ於
 テ證人ノ申述ヲ聽キ又ハ其他ノ吟味手續ヲ
 為ス可キ時ハ覆審院ノ上席人被告人タル裁
 判役全負又ハ一負ノ在ル州又ハ郡外ノ下吟
 味掛リ裁判役ニ任レテ此等ノ諸事ヲ為サシ

ム可シ

第四百八十九條 前條ニ記シタル下吟味掛リ
 裁判役ハ證人ノ申述ヲ聽キ且其他已レノ任
 セラレタル吟味ノ手續ヲ為シ終リタル後調
 書及ヒ其他ノ書類ニ封印ヲ為シテ覆審院ノ
 上席人ニ送ル可シ

第四百九十條 覆審院ノ上席人ハ裁判事務宰
 相ヨリ受取りタル書類又ハ申立人ヨリ差出
 シタル書類又ハ其後得タル書類下吟味ヲ為
 サレタル
 書類ヲ檢視シタル上ニテ被告人ヲ禁錮ス
 云フ

可シト思フ時ハ禁錮狀ヲ出ス可シ
 其禁錮狀ニハ被告人ヲ入レ置ク可キ留置場
 ヲ記ス可シ

第四百九十一條 覆審院ノ上席人ハ直チニ其
 吟味ニ管スル書類ヲ檢事長ニ送り檢事長五
 日內ニ覆審院中ノ裁判言渡取消局ニ被告人
 ノ罪犯申立ヲ記スル求刑書ヲ出ス可シ

第四百九十二條 罪犯ノ申立書ヲ裁判言渡取
 消局ニ出ス前ニ被告人ヲ禁錮シタルト否ト
 ヲ問ハス其局ニテ他ノ事務ヲ暫ク差置キ其

罪犯ノ申立ヲ取上ク可キヤ否ヲ裁判ス可シ
 其局ニテ罪犯申立ヲ棄却スル時ハ被告人ヲ
 赦宥ス可キヲ言渡ス可シ
 其局ニテ罪犯申立ヲ取上クル時ハ被告人々
 ル裁判役全員又ハ一員ノ吟味ヲ覆審院ノ民
 事局ニ移シ民事局ニテ其被告人重罪ヲ犯シ
 タリト告ク可キヤ否ヲ裁判ス可シ
 第四百九十三條 既ニ覆審院ニ訴出シタル事
 件ヲ附帶シテ同上ノ罪犯申立ヲ為サントス
 ル時ハ是迄ノ訴ヲ管轄スル局ニ其申立ヲ為

ス可シ但シ此局刑事局又ハ裁判言渡取消局
 タル時ハ其申立ヲ取上ケタル上ニテ其吟味
 ヲ民事局ニ移シ又是迄ノ訴ヲ管轄スル局民
 事局タル時ハ其吟味ヲ裁判言渡取消局ニ移
 ス可シ

第四百九十四條 覆審院中ノ一局ニテ裁判役
 ニ對シ損失ノ償ヲ要ムル訴又ハ總テ其他ノ
 訴ヲ吟味スル時主タル申立ト附帶ノ申立ト
 ヲ問ハス裁判役ノ犯罪申立書ヲ差出ス者ナ
 シト雖モ其局ニテ第四百七十九條ニ記スル

裁判役全頁又ハ一頁ニ罪犯アリト知得シタルニ於テハ其局ニテ前條ニ循ヒ其罪犯ノ吟味ヲ他局ニ移シ為サシム可キヲ公務ヲ以テ言渡ス可シ

第四百九十五條 若シ覆審院ノ諸局合同シテ訴ヲ吟味スル時前條ニ記スル如ク裁判役ノ罪犯ヲ知リタルニ於テハ民事局ニ其吟味ヲ移シ為サシム可シ

第四百九十六條 如何ナル場合ニ於テモ犯罪申立書ニ因ルト否トニ管セズ總テ同上ノ罪

犯吟味ヲ為ス可キ局ニ於テ被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キヤ否ヲ裁斷ス可シ其局ノ上席人ハ通常下吟味掛リ裁判役ノ為ス可キ職務ヲ行フ可シ

第四百九十七條 前條ニ記スル局ノ上席人ハ證人ノ申述ヲ聽ク事及ヒ被告人ヲ問糺ス事ヲ別段指定メタル下吟味掛リ裁判役ニ任カスヲ得可シ但シ其下吟味掛リ裁判役ハ被告人ノ在リシ州又ハ郡外ノ者タル可シ

第四百九十八條 上席人ヨリ渡ス所ノ收監狀

ニハ被告人ヲ入ル可キ留置場ヲ指定ス可シ
 第四百九十九條 前數條ニ記スル罪犯ノ吟味
 ヲ為ス覆審院中ノ一局ハ被告人重罪ヲ犯シ
 タリト告ク可キヤ否ヲ評議ス可シ但シ其評
 議ハ公ケニ為ス可カラス又其裁判役ノ負數
 ハ偶數タル可カラス
 其裁判役中ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告
 クルヲ可トセサル者半ハ以上ナル時ハ犯罪
 申立ヲ棄却スル言渡ヲ為シ檢事長被告人ヲ
 赦宥セレム可シ

第五百條 裁判役中ニテ被告人重罪ヲ犯シタ
 リト告クルヲ可ナリトスル者半ハ以上ナル
 時ハ其旨ヲ言渡ス可シ但シ其言渡書ニハ被
 告人名捕ノ言渡ヲ附記ス可シ
 此場合ニ於テハ其言渡書ニ指定メタル重罪
 裁判所附ノ留置場ニ其被告人ヲ移ス可シ
 第五百一條 前數條ニ記スル如ク覆審院ニテ
 為シタル下吟味ノ手續ハ法式ニ背キタルニ
 付キ之ヲ取消サント訴フ可カラス
 其吟味ノ手續ハ被告人タル裁判役ト共ニ罪

ヲ犯シタル者ニ通シ用フ可シ但シ其者裁判所ノ官吏ニ非サル時ト雖モ亦同一ナリトス
第五百二條 其他治罪法中ニテ此章中ニ記スル規則ト抵触セサル箇條ハ裁判役罪犯ノ吟味ニ通シ用フ可シ

第五百三條 覆審院中ノ一局ヨリ被告人ヲ重罪裁判所ニ移シタル後被告人重罪裁判所ノ裁判言渡ヲ取消サント覆審院ニ願出シタル時覆審院中ノ刑事局ニ嘗テ其被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キ旨ヲ述ヘシ裁判役アル

ニ於テハ其裁判役其取消願ヲ吟味スル席ニ
参ス可カラス第二百五十七條見合

然レハ再度取消願ヲ為シ覆審院ノ各局合同シテ其願ヲ吟味スル時ハ如何ナル裁判役ト雖モ其吟味ノ席ニ参スルヲ得可シ

○第四章 官署ノ權ヲ慢侮スル罪

第五百四條 訟庭又ハ其他公ケニ吟味ノ手續ヲ為ス場所ニ於テ來聽スル者称賛誹謗ノ聲ヲ發レ又ハ如何ナル方法ヲ問ハス喧噪ヲ生スルヲアル時ハ其裁判所ノ上席人又ハ裁判

役其者ヲ逐出サレム可シ若シ其者其命ニ抗
 スル時又ハ一度裁判所ヲ出テタル後再ヒ入
 リ来ル時ハ上席人又ハ裁判役之ヲ名捕ヘテ
 裁判所附ノ留置場ニ入ル可キヲ言渡シ其
 言渡ヲ調書ニ記ス可シ但シ其留置場ノ監守
 人ハ其調書ヲ見タル上ニテ其犯人ヲ受取リ
 二十四時間留置場ニ入レ置ク可シ

第五百五條 前條ニ記シタル喧噪ニ附加シテ

懲治刑輕罪又ハ警察違反ノ刑ノ註刑ニ處ス可
 キ罪ヲ犯シタル時ハ裁判所ニテ其罪犯ヲ證

シタル上直チニ其席ニテ刑ヲ言渡ス可シ但
 シ其言渡ヲ控訴レ得可キト否トハ左ノ如シ
 如何ナル裁判所ヨリ言渡シタルヲ問ハス
 警察違反ノ刑ノ言渡ハ之ヲ控訴ス可カラ
 ス
 又懲治刑ノ言渡ハ輕罪裁判所又ハ註誤裁
 判役ヨリ為シタル時之ヲ控訴スルヲ得
 可シ

第五百六條 輕罪裁判所又ハ註誤裁判所ニ於
 テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ此等ノ裁判所

ニテ其犯人ヲ名捕ヘシメ且其罪犯ノ調書ヲ
記シタル後書類ト犯人トヲ重罪管轄ノ裁判
所ニ送ル可シ

第五百七條 覆審院、控訴院、重罪裁判所ノ吟味
ノ席ニテ現ニ重罪ヲ犯シタル時ハ此等ノ裁
判所ニテ直チニ其裁判ヲ言渡ス可シ
此等ノ裁判所ニ於テハ證人ト犯人トヲ問糾
シ及ヒ犯人ノ自カラ撰ミタル代言人或ハ上
席人ヨリ犯人ノ為メニ指定メタル代言人ノ
申述ヲ聽キ公ケニ其罪犯ヲ證シ且檢事長又

ハ其代役ノ申立ヲ聽キタル上ニテ其犯人ヲ
刑ニ處スル言渡ヲ為ス可シ但シ其言渡書ニ
ハ其言渡ノ趣意ヲ附記ス可シ

第五百八條 前條ノ場合ニ於テ吟味ノ席ニア
ル裁判役五頁又ハ六頁タル時ハ四頁以上ノ
投言アルニ非サレハ刑ヲ言渡ス可カラス
又裁判役七頁タル時ハ五頁以上ノ投言アル
ニ非サレハ刑ヲ言渡ス可カラス
又裁判役八頁以上タル時ハ其全頁中四分三
以上ノ投言アルニ非サレハ刑ヲ言渡ス可カ

ラス若シ缺數アラハ罪ヲ赦宥スル投言中ニ加フ可シ

第五百九條 州長、郡長、邑長、邑長ノ輔佐、行政警察官吏、司法警察官吏其公務ヲ行フニ當リ罪ヲ犯ス者アル時ハ第五百四條ニ記スル如ク警察ノ職務ヲ行フ可シ但シ此等ノ官吏ハ犯人ヲ名捕ヘタル後罪犯ノ調書ヲ記シ其調書ト犯人トヲ管轄ノ裁判所ニ送ル可シ

○第五章 重罪、輕罪、註誤ニ付キ皇族及ヒ高貴ナル官吏ノ述フル證ヲ聽ク

方法

第五百十條 皇族、高貴ノ職位ニ在ル者、裁判事務宰相ハ陪審ノ面前ニ於テ辯論ヲ為ス場合ト雖モ證人トシテ之ヲ裁判所ニ呼出ス可カラス但シ皇帝訴ニ管スル者ノ願ニ因リ又ハ裁判事務宰相ノ申立ニ因リ別段命令書ヲ下シテ此等ノ者前ニ記列スル數人ヲ裁判所ニ呼出シ證ヲ述ヘシム可キトテ命レタル時ハ格別ナリトス

第五百十一條 皇帝ノ命令アル時ノ外前條ニ

記セシ數人控訴院所在ノ地ニ現ニ在ル時ハ
 其控訴院ノ上席人其人ノ述フル所ノ證ヲ聽
 取テ之ヲ書面ニ記ス可シ又其人控訴院所在
 ノ地ニ在ラサル時ハ其現ニ在ル所ノ郡ノ初
 告裁判所ノ上席人其證ヲ聽取テ之ヲ書面ニ
 記ス可シ
 犯罪人ヲ吟味スル裁判所又ハ下吟味掛リ裁
 判役同上ノ上席人ヲシテ證ノ申述ヲ聽カシ
 ムル為メ罪犯ノ事件並ニ問目ヲ記シタル箇
 條書ヲ其上席人ニ送ル可シ

其上席人ハ證ノ申述ヲ聽ク為メ第一項ニ記
 スル各人ノ住所ニ至ル可シ
 第五百十二條 上席人ノ記シタル證據聞取書
 ハ直チニ之ヲ其上席人ノ在ル裁判所ノ書記
 局ニ出シ又ハ其證ヲ聽クヲ求メシ裁判所
 ノ書記局或ハ其旨ヲ求メシ下吟味掛リ裁判
 役ノ在ル裁判所ノ書記局ニ封印シテ之ヲ送
 リ此等ノ裁判所ノ書記局ヨリ遲延ナク其書
 ヲ檢察官ニ送ル可シ
 其證據聞取書ハ陪審ノ面前ニテ吟味ヲ為ス

時公ケニ陪審ニ讀聞カセ被告人及ヒ證人等
 フレテ之ヲ辨論セレム可シ若シ此規則ニ背
 ク時ハ其間取書ノ効ナカル可シ
 第五百十三條 若シ皇帝ヨリ第五百十條ニ記
 スル各人ヲ陪審ノ面前ニ呼出ス可キヲ命
 シタル時ハ其命令書ニ同上ノ各人證ヲ述フ
 ルニ付テノ法式ヲ定ム可シ
 第五百十四條 裁判事務宰相ヲ除クノ外總テ
 ノ宰相、上等ノ官吏、行政ノ權ヲ任セラレタル
 參議官、現ニ奉職スル將帥、外國政府ニ派出シ

タル第一等使節及ヒ其他ノ辦理公使ノ述フ
 ル證ヲ聽クニ付テハ左ノ如クタル可シ
 此等ノ官吏ノ現ニ住スル地又ハ偶然居合セ
 タル地ノ重罪裁判所又ハ此等ノ地ノ下吟味
 掛リ裁判役ノ在ル裁判所ニ於テ其證ヲ聽ク
 必要ナル時ハ此等ノ官吏通常ノ式ニ循ヒ
 其證ヲ述フ可シ裁判所ニ出席レテ平常ノ証
 人ノ如ク証ヲ述フ可キヲ云
 又同上ノ地ヲ管轄セサル裁判所ニ於テ其證
 ノヲ聽ク必要ナル時陪審ノ面前ニテ證ヲ述

ヘシムルニ及ハサル場合ニ於ハ其裁判所ノ
 上席人又ハ下吟味掛リ裁判役ヨリ同上ノ官
 吏ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ノ上席人又ハ
 下吟味掛リ裁判役ニ證ヲ聽取ル可キ罪犯ノ
 事件並ニ問目ヲ記レタル箇條書ヲ送リテ其
 證ヲ聽カシム可シ
 若シ外國政府ニ派出シタル辦理公使ノ證ヲ
 聽ク可キ時ハ前項ニ記スル箇條書ヲ裁判事
 務宰相ニ差出シ其宰相ヨリ辦理公使所在ノ
 地ニ其箇條書ヲ送リ且其證ヲ聽ク可キ人ヲ

指定ム可シ

第五百十五條 前條ニ記レタル箇條書ヲ受取
 リタル上席人又ハ下吟味掛リ裁判役ハ同上
 ノ官吏ヲ己レノ面前ニ來ラレメ其述フル所
 ノ證ヲ書面ニ記ス可シ

第五百十六條 其書面ハ之ニ封印ヲ為シテ其
 證ヲ要スル裁判所ノ書記局ニ送ル可キト並
 ニ之ヲ檢察官ニ送リタル後ニ讀上ク可キト
 第五百十二條ニ記スル如クタル可シ若シ此
 規則ニ背ク時ハ其書面ノ効ナカル可シ

第五百十七條 第五百十四條ニ記スル官吏其住スル所ノ地又ハ其偶然居合セタル地ヲ管轄セサル裁判所ノ陪審ノ面前ニテ證ヲ述フル為メ其裁判所ニ呼出ヲ受クル時ハ皇帝ヨリ此等ノ官吏其裁判所ニ出ルヲ免ルニ可キノ令ヲ下スヲ得可レ

此場合ニ於テハ同上ノ官吏ノ述フル證ヲ書面ニ記ス可ク且第五百十四條第五百十五條第五百十六條ノ規則ヲ通レ用フ可レ

○第六章 刑ヲ言渡サレシ後逃込シテ

名捕ヘラレタル者ノ人違ヒニ非サルヲ認ムル事

第五百十八條 刑ヲ言渡サレシ後逃込シテ名捕ヘラレタル者ノ人違ヒニ非サルヲ認ムルヲハ其刑ヲ言渡セシ裁判所ニテ之ヲ為ス可シ

又流刑或ハ追放ノ刑ニ處セラレシ者其在ル可キ地外ニ出テ名捕ヘラレタル時モ亦前項ニ等シク其刑ヲ言渡セシ裁判所ニテ其人違ヒニ非サルヲ認メ且其罪其在ル可キ地ニ相外ニ出ル罪ニ相

當ナル刑ヲ言渡ス可シ刑法第十七條第三十三條見合

第五百十九條 裁判所ニテハ檢察長ノ求メニ

テ呼出シタル證人ト名捕ヘラレタル者ノ求

メニテ呼出シタル證人トテ問糺シタル上陪

審ノ立會ナクシテ前條ノ言渡ル人違フ認ムルサ

言ヲ為ス可シ

其言渡ヲ為スニハ公ケニ吟味ヲ為シ名捕ヘ

ラレタル者其席ニ出ツ可シ若シ此規則ニ背

ク時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第五百二十條 檢察長及ヒ名捕ヘラレタル者

ハ人違ヒニ非サルコトヲ認ムルニ付テノ言渡

ヲ取消サント覆審院ニ求ムルコトヲ得可シ但

シ其取消ヲ求ムルニ付テハ治罪法ニ記スル

一般ノ法式ト定期トニ循フ可シ

○第七章 裁判所ノ書類又ハ裁判言渡

書ヲ失ヒシ時其處置ヲ為ス方法

第五百二十一條 火災洪水又ハ其他非常ノ事

ニ因リ未タ現ニ執行ハサル重罪又ハ輕罪ノ

裁判言渡書ノ正本ヲ失フタル時又ハ未決ノ

吟味手續ノ書類ノ正本ヲ失フタル時之ヲ取

戻スヲ能ハサルニ於テハ後ノ數條ニ記スル
如ク處置ス可シ

第五百二十二條 裁判言渡書ノ公正ナル副本

アル時ハ之ヲ正本ト看做シ總テノ裁判言渡

書ヲ預カル場所裁判所ノ書記局ヲ云フニ其副本ヲ納ム

可シ

之カ為メ總テ其公正ナル副本ヲ預カル官吏

又ハ其他ノ者其言渡ヲ為セシ裁判所ノ上席

人ノ命令書ニ循ヒ其副本ヲ其裁判所ノ書記

局ニ出ス可シ若シ之ヲ出サ、ル時ハ名捕ハ

ラシ可シ

其公正ノ副本ヲ預カル者其上席人ノ命令書

ヲ示ス時ハ其副本ニ管係アル者ニ對シ既ニ

之ヲ裁判所ノ書記局ニ差出シタルノ證トス

可シ

其副本ノ預リ人ハ之ヲ書記局ニ出シタル上

無税ニテ其寫ヲ受取ルヲ得可シ

第五百二十三條 若シ重罪ノ裁判言渡書ノ正

本ヲ失ヒ且其公正ノ副本アラサル時陪審ノ

決斷書ノ正本又ハ公正ノ副本アルニ於テハ

其決斷書ニ據リ更ニ裁判言渡ヲ為ス可レ
 第五百二十四條 若シ前條ノ場合ニ於テ陪審
 ノ決斷書ヲ失フタル時又ハ陪審ノ立會ナク
 シテ裁判言渡ヲ為シタル時輕罪ニ管其吟味
 手續ノ書面ヲモ亦失フタルニ於テハ正本ヲ
 モ公正ノ副本ヲモ失フタル書面ヲ記セシヨ
 リ以後ノ吟味ノ手續ヲ更ニ為ス可レ

辻 士 革 校

佛蘭西治罪法四終
 法律書

